



TITLE:

プロテインCおよびそのインヒビターに関する病態生化学的研究(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

鈴木, 宏治; 楠本, 宏司; 橋本, 仙一郎; 松田, 儀一

CITATION:

鈴木, 宏治 ...[et al]. プロテインCおよびそのインヒビターに関する病態生化学的研究(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1985, 15: 60-60

ISSUE DATE:

1985-10-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163524>

RIGHT:

STLV自然感染ザル計11種(チンパンジー、テナガザル、ミドリザル、ブタオザル、ベニガオザル、タイワンザル、ニホンザル、ヤクザル、ボンネットザル、サイクスザル、マウラザル)より約20株のSTLV産生細胞株を樹立した。

いずれもHTLV-1と交差する抗原を保有し、電顕によりC型ウイルス粒子が検出された。これらの細胞はいずれも非Bであったが、非Tもあり、またTの中でも helper と suppressor マーカーを有しているものがあった。

2) STLVプロウイルスの解析

上記一部の樹立細胞のプロウイルスに関して、HTLV-1のcDNAをプローブとして解析を行ったところ、サイズと遺伝子配列がHTLV-1と等しい塩基配列が検出された。しかし、Pst Iによる切断地図はヒトとサルおよびサル種間で異なっていた。すなわち同じマカク属に属するブタオザル、ベニガオザル、ニホンザルは同一の切断地図を示したが、ミドリザルとチンパンジーでは各々異なるパターンを示した。このことはヒトおよび異なるサル種間における相互伝達が起こったとしても、最近のことではなく、かなり以前の出来事と考えられる。

3) STLVの垂直感染の実験的証明

昨年度に引き続き、妊娠ニホンザル3匹とアカゲザル1匹の帝王切開により得た臍帯血リンパ球、胸腺、脾臓、骨髓細胞の培養を行い、ウイルス抗原の検出を行った。その結果、ニホンザル2例の臍帯血リンパ球から抗原が検出された。昨年度までのニホンザル、アカゲザル、カニクイザルの成績をまとめると、計12匹のうち4例で検出されたことになり、ウイルスの母親から胎児への移行が証明された。

課 題 16

プロテインCおよびそのインヒビターに関する 病態生化学的研究

鈴木宏治・楠本宏司・橋本仙一郎(三重大・医)・松田儀一(三重大・医・病院)

サル類の肝疾患—特に肝炎ウイルスとの関係について—

阿部賢治(国立予研・病理)

ヒトウイルス性肝炎の研究にチンパンジーが唯一の感受性動物として用いられている。しかし霊長類の自然界でのA型肝炎ウイルス(HAV)やB型肝炎ウイルス(HBV)の感染状況については必ずしも十分な検討がなされていない。そこで京大霊長研にて飼育されている野生サル類についてHAV及びHBVの感染状況について検討し、チンパンジーに代わる新しいヒト肝炎ウイルス感受性動物の開発を試みた。対象となったサルは、ニホンザル、アカゲザル、マントヒヒ、ボンネット、アッサム、シロガオオマキ、ワオキツネ、フサオマキ、ベニガオザル、ブタオザル、ミドリザル、ヨザル、オオギャラゴ、リスザル、クモザル、カニクイザル、チンパンジー、パタスの計18種である。ウイルスの検索は血清中のHAV抗体の測定をELISA(HAVAB, ダイナボット)にて実施した。結果はニホンザル167/294(陽性数/総数, 以下同様)、アカゲザル57/123, マントヒヒ0/6, ボンネット2/2, アッサム3/3, シロガオオマキ1/1, ワオキツネ2/2, フサオマキ1/2, ベニガオザル4/5, ブタオザル4/4, ミドリザル1/2, ヨザル5/6, オオギャラゴ2/2, リスザル1/1, クモザル1/1, カニクイザル3/3, チンパンジー3/5, パタス1/2であった。以上の結果より絶対数が多いニホンザルでの高陽性率(56%)が目立った。ニホンザルを群別でみると長瀬(69%), 高浜(64%)と高率なのにに対し嵐山0%と感染率の差がみられ、疫学的にも興味ある知見が得られた。B型肝炎については日数の都合上間に合わなかったが、近日中に測定予定である。